

時間の流れが作る広さ
- 「空虚の中心」における居場所の設計 -

21718023 佐藤 啓花
指導教員 細井昭憲 准教授

時間の流れ 広さ 図と地
実空間 空虚 北の丸公園

1. 背景と目的

本研究は「時間の流れ」を用いた設計を目指すものである。「時間の流れ」とは自分を取り巻く感覚的な「時」のことである。例えば、自分がいる場所には穏やかな時間が流れていて、遠くではせわしない時間が流れていると感ずることがある。この世界には様々な時間の流れが存在しており、それに気付くことで、自分の立っている場所に物理的な空間以上の広がりを感じられる。

『広さ』は『時間の流れ』によって作られる」と仮定し、それをもとに設計を行う。訪れた人が自分を取り囲む「時間の流れ」の多様さに気づき、広々とした気持ちになる場所の設計を目指す。

2. 時間の流れが作る広さ

「時間の流れ」を用いた設計を行うにあたり、何故時間の流れが広さを作るのかを論じる。

2-1. 時間の流れの生じ方

本設計では、「時間の流れ」はあらかじめ存在するものではなく、意識されることによって初めて生じるものだと考える。哲学者、アンリ・ベルクソンはこれを「空間化」という言葉を使って説明している。真の時間は「持続」というそれだけでは認識することができないものであり、ものごとに持続が投影され「空間化」されることで時間を感じられるという。

このことから、時間の流れは「空間化」の仕方によって変化すると考える。例えば、公園で本を読んでいる時に、周りで遊んでいる子供達を意識するのと、手元の小説に集中するのでは、時間の感じ方が異なるだろう。同じ空間であっても捉え方によって「時間の流れ」は変化する。

2-2. 捉え方の多面性による広さ

意識する「時間の流れ」が変わると、自分を取り巻く空間が変化したように感じられる。どの「時間の流れ」を背景とするかによって、自己の在り方が変化するように感じられる。



図1 ルビンの壺

「時間の流れ」（背景）と

「それを感じる自分」との間にはルビンの壺（図1）のような表裏一体的な図と地の関係性がある。自分の周りには時間が取り巻いており、また自分も何かの時間の流れの一部になっている。これらのことに気づくことで、自分のいる場所の広がりを感じられる。

このような時間の流れによる広さの感覚は、普段の生活で意識されにくい。そのため本設計では、訪れた人々がこの感覚に気づかされるような空間の設計を目指す。

3. 「時間の流れ」が意識される空間の考察

日々の生活の中で、多面的な時間の流れに気付かされることがある。そのような経験をした空間を集め、分析を行った。



図2 事例調査

3-1. 地と図の表裏一体性

上に示した写真は、窓の景色、風景、絵画である。窓からは、家の中と窓の外が同時に見えていたり、風景は木の隙間からビルが見えていたり、絵画は手前の部屋と奥の部屋があるなど、どれも複数の場が存在している。

このような空間では、何を「地」、「図」と捉えるかによって時間の流れ方が変化する。例えば木に囲まれているように感じるか、ビルに囲まれていると思うかで自分の周りに流れる時間は異なる。絵画を見るときに、どのように作品の世界に入り込むかについても同じことが言える。

異なる要素の場が混在している空間では、図と地の可変性によって、多様な時間の流れに気づくことができる。

3-2.余白

先に挙げた事例に共通するもう一つの点は、分かりにくさである。窓から見た景色は、家の中の様子や向こう側の建物が部分的にしか見えない。風景も、ビルが木々によって隠されているという特徴がある。絵画は、手前の部屋の全容が分からない構図になっており、さらに奥の部屋の様子も大部分が壁で隠されている。

これらの不明は、想像力の働く余白となる。自分の居る場所以外にも時間が流れていると感じることで、世界の広がりを感じる事ができる。

「図と地の表裏一体性」、「余白」の二つの要素が「時間の流れ」を意識させると考え、これらを設計の材料とする。

4.設計提案

4-1.設計敷地

設計敷地は、江戸城内郭の跡地北端にある北の丸公園の一角とする。(図3)

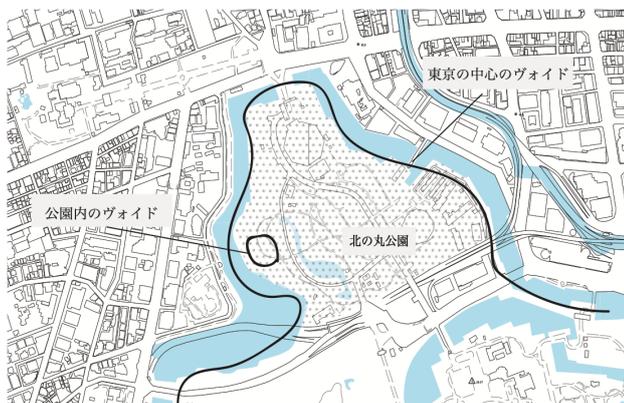


図3 対象敷地

北の丸公園は濠に囲まれており、外側から様子を伺うことができない。公園内に入ると、周辺から切り離された固有の時間が流れているように感じる。都市の流動的な時間の中にありながら、内部では時間の流れが単調に感じられるという特徴からこの敷地を選定した。

フランスの哲学者ロラン・バルトは東京の中心について、「いかにもこの都市は中心をもっている。だが、その中心は空虚である」と述べた。これは、皇居の禁域性や、江戸城内郭跡地の一帯の濠に囲まれている形態、交通などが中心を迂回するように巡っている様子を指している。

一方、敷地周辺には、日本武道館や東京国立近代美術館、科学技術館など、数多くのランドマークが存在しており、多様な時間が流れている。

4-2.提案内容

北の丸公園内に、人々の居場所となる建築を設計する。訪れた人がこの場所の空虚性を再認識しながらも、この場所に在る時間による広さを感じ、思わずとどまりたく

なるような場所を提案する。

4-2-1.囲いの内に生じる時間

建築は、公園の道に沿って円環を描くよう配置し、「空虚の中心」にいることを強調する。図式的かつ経験的に、囲まれた時間の流れを感じるよう設計する。

この円環は、円弧を持つ小さな建物が連なって、部分と全体を構成している。(図4) 円弧は、内側と外側という場所性が生じる求心的な図形である。この図形が場所によって様々な方向を向いている。場所によって内側と外側の感じ方を変化させながら、奥行きや重なりを作り出す。(図5)

全体を捉えると一つの大きな円環の中にいるが、一瞬一瞬の体験としては多様な時間が移り変わっていく空間を設計する。

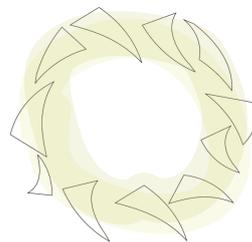


図4 ダイアグラム



図5 模型写真

4-2-2.エッジに対流する時間

公園内の、濠に近いエッジの部分に設計を行う。そこでは、木々の隙間から濠の対岸のビルが見えたり、遠くを走る車の音が聞こえたりと、公園内の時間と周辺の時間が入り混じっている。内に囲まれた時間と周辺に流れる時間を、多重に感じられる場所の設計を目指す。

「時間の流れ」を感じるによって、訪れた人々がその場所を実感し、居場所が生まれる。「空虚の中心」で、そこに繋がる無数のものごとに思いを馳せ、無限に広がる豊かな気持ちになることを期待する。

《参考文献》

- ・アンリ・ベルクソン (平井啓之訳)『時間と自由』株式会社白水社(2009)
- ・萬屋健司『ヴィルヘルム・ハマスホイ 静寂の詩人』株式会社東京美術(2020)
- ・コトバンク：図と地, <https://kotobank.jp/word/図と地-542555>,(2020/11/31)
- ・ロラン・バルト (宗左近訳)『表徴の帝国』株式会社筑摩書房(1996)
- ・渡部一二『江戸の川・復活』東海大学出版会 (2008)
- ・環境省：北の丸公園 (皇居外苑北の丸地区), https://www.env.go.jp/garden/kokyogaien/1_intro/his_08.html(2020/12/1)
- ・木村敏『時間と自己』中央公論新社(1982)

2020年度 卒業研究梗概

[通し番号 (中央研究室で管理するため記載不要)]